

28 日本育ちのフランス人版画家：ポール・ジャクレー

ポール・ジャクレー（1896-1960）は、父ポール＝フレデリックがお雇い外国人のフランス語教師として日本へ赴任したことに伴い、1899年から東京で生活を始めました。進学した東京の小学校と中学校では、ジャクレーは学校で唯一の西洋人でした。幼い頃から病弱であったジャクレーは、一年の半分を東京の中学校で過ごし、残り半分は太平洋に面した伊豆で家庭教師について学びました。教育熱心な両親のおかげで、ジャクレーは、フランス語、日本語、英語のほか、絵画や書道、バイオリンや三味線、乗馬や水泳といったスポーツを身に付けていきました。中でも浮世絵に関心を示し、当時の有名な日本人の洋画家や浮世絵師の教えを受けました。



Paul JACOULET
ポール・ジャクレー

ジャクレーが中学校を卒業した翌年の1914年に、第一次世界大戦が勃発すると、父ポール＝フレデリックは、兵士となるためにフランスへ帰国しました。ポール＝フレデリックは前線で活躍したものの、戦争によって傷ついた身体で帰国しました。経済的に苦しくなり、ジャクレーはフランス大使館で翻訳の仕事を始めました。その後、父の他界、母のフランスへの帰国、1923年に発生した関東大震災という不幸が続きました。

1929年、息子の体調を心配する母の勧めで、ジャクレーは気候が温暖なミクロネシア地域の島々を訪れました。そこで意欲的に創作活動を行い、数多くのデッサンや水彩画を制作しました。1933年に、ジャクレーは木版画で身を立てる決意をしました。日本の伝統的な浮世絵の作り方である画家、彫師と摺師の分業制を復活させる一方で、紙や絵の具は新しい素材を取り入れました。「若礼版画研究所」を立ち上げました。ジャクレーは、日本の浮世絵と仏領ポリネシアのタヒチで生活したポール・ゴーギャンの色使いからインスピレーションを得た独創的なスタイルを確立しました。

1941年に太平洋戦争が勃発すると、画家としての活動を中断せざるを得なくなりました。1945年初めには、フランス国籍を持つジャクレーは、長野県の軽井沢に強制疎開させられ、憲兵の監視下での生活を余儀なくされました。戦後は、美しい山に囲まれた軽井沢に住居とアトリエを構えて、1960年に病で生涯を閉じるまで、そこで版画の制作を続けました。生涯のほとんどを日本で過ごしたジャクレーは、東京都内の墓地で、父ポール＝フレデリックとともに静かに眠っています。

掲載日：2023年7月3日